

栄光

説教

『何もかも捨てて』

ルカによる福音書5章17節～21節

東京神学大学4年 小林光恵

説教・「何もかも捨てて」 小林光恵神学生…1
特集・読書の秋 —お勧めの1冊 ……………2
説教・「一体となった 賛美」 岸俊彦牧師…6
ルデヤ会議演会 報告……………7
長老のファイル…7
牧師の書齋から…8

主イエスに招かれたレビは、何もかも捨てて立ち上がり、従いました。

私たちは、いつのまにか座り込んでしまっていた場所から、今朝主イエスに見出していただき、御言葉を聞くために、そして、新たに立ち上がり、従う者とされるために、ここに集められました。

そもそも、私たちは自分の大切なものを、神さまのために捨てることができませぬ。それどころか、自分にとって本当には役に立たないものと分かっているながら、それを捨て、その場所を離れることができなないことも、私たちにはあるのではないのでしょうか。

主イエスに従う者へと変えていただいた歩みの中でも、いつの間

第一に、この宴会は主イエスのための宴会でした。レビは自分の家の扉を大きく開き、自分の持っていた多くの財産を用いて、宴会を整えました。それまで自分のために使っていたお金や物、時間を、主イエスのためにお献げしたので

す。主の弟子とされた私たちもまた、自分に与えられているものを、すべて主イエスのためにお献げする、教会のためにお献げする生き方へと変えられました。主イエスに見出していただく前には、すっかり自分のものだと思っていたものを、喜んで主イエスのためにお献げする者へと、変えていただいているのです。

第二に、この宴会には、徴税人

たちやほかの人々が大勢いたことが記されています。レビは主イエスだけを招き、二人で食事をしたのではありません。過去の自分と同じように罪の中に生き、自分では変わることができないでいる仲間、大勢の人たちに、自分をすっかり変え、救ってくださった主イエスを紹介したのです。レビは、人々が主イエスの声を聞くこと

を、自分に与えられた喜びが、周りの人々にも与えられ、広がっていくことを願ったのです。

主の弟子とされた私たちの信仰生活は、神さまとの一対一のやりとり（自分が神さまに祈り、御言葉に満たされること）では終わりません。私たちは、教会の中で御言葉を聞き、教会の仲間と共に祈り、兄弟姉妹と共に主に従って歩んでいくのです。自分に与えられた救いの喜びが、さらに多くの人々へと伝えられることを願い、教会に人々を招き、迎え入れる者へと変えられたのです。

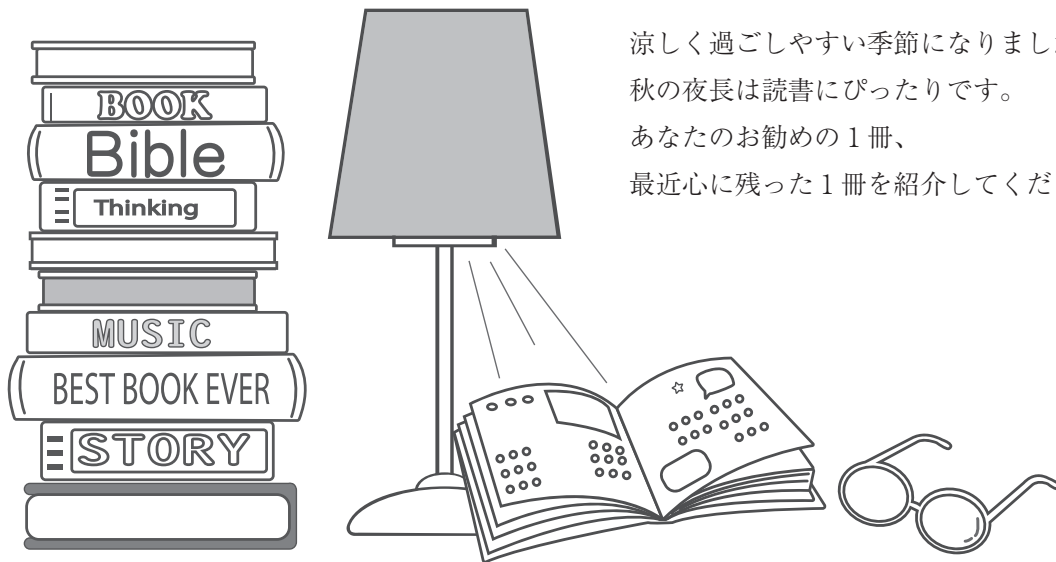
この後歌う讚美歌21・515には「どんなよいわざも、キリスト・イエスの十字架の愛には比べられない」とあります。私たちが主イエスに應えるどんな献げ物も、主イエスが、私たちのために十字架にかかり死んでくださったことに比べることはできません。主イエスは、私たちのために御自分の命を捨ててくださいました。すべてを捨ててくださった主イエスが、今、「私に従ってください」と招いておられるのです。

にか信仰以外の何かを握りしめ、離れるべき場所に座り込み、主イエス以外の誰かに従おうとしている。そのような自分に気付かされるのです。私たちは、そのことで、自分を責めることはできても、自分から神さまの前に悔い改め、変わることはできません。

主イエスは、そのような私たちに「私に従ってください」と言うてくださいます。主イエスだけが、私たちを誤った道から引き返らせ、離れるべき場所から立ち上がらせ、握りしめている手を開かせ、何もかもを捨てさせてくださるお方です。

何もかも捨てたレビは、自分の家で主イエスのために盛大な宴会を催しました。

読書の秋 — お勧めの1冊



涼しく過ごしやすい季節になりました。
秋の夜長は読書にぴったりです。
あなたのお勧めの1冊、
最近心に残った1冊を紹介してください。

アリス・マンローの世界

入谷眞知子

「我がチエーホフ」と書評家が呼ぶ、今や短編小説の第一人者は、カナダ人として初めてノーベル文学賞を受賞した、アリス・マンローです。10年前のことです。彼女は82歳でした。

それまで短編にはあまり関心がなかったのに、不覚にもその存在を知らず、「短編の女王」最新・最後の短編集の帯が付いた洒落た表紙に惹かれて、そそくさと買った本が『ディア・ライフ』でした。其々20頁くらいの短い話が14編収められています。「日本に届く」「砂利」は、仕事を持つ女性なら誰でも身につまされる話ですし、「安息の場所 (Haven)」はクスッと笑える内容でした。

37歳で初出版した短編集が、カナダ総督文学賞を受賞して以来、全米批評家協会賞、ブッカー賞と評価を得てきた作品はどれも、「普通の人々の平凡な暮らしの中

での人間模様が人間存在の普遍に通じているので、読者の心を揺さぶるのだ」と、訳者（素晴らしい翻訳！）はあとがきで述べています。

日本語訳の短編は優に百編を超えますが、どれも人間の心の機微が描かれていて、知らず知らずのうちに、我が身を振り返り、周りの人たちの人生を思い返してしまいます。

どの作品も魅力的ですが、『イラクサ』に収録されている短編の「記憶に残っていること」を推します。人生ただ一度の体験を、主人公メリエルは、記憶して記憶して、宝物としてしまっけて置き、夫ピエールが身罷るまで家庭を守った、という内容です。

作者アリス・マンローは言っています。「私たちは多くの悔いを背負いながら、取り返しのでない過去を自分に語り直し語り直して生きています。私たちは記憶によって、自分の物語を自分自身に語り続け、そして他人にはちょっと異なるバージョンを語る」と。

元氣付けられた本

岩井直子

生来視力だけは良く、1.5、2.0でしたが、最近では野球観戦に行ってもボールの行方を見失い、深刻なのは聖書も讃美歌も読み間違え、歌詞間違え、と、これは私の活字離れの言い訳です。

そんな中ですが一気に読破したのが『ヴィオラ母さん』です。漫画テルマエ・ロマエで一躍有名になったヤマザキマリが実母リヨウコの事を書いた本です。

女子大卒業後、勤務先の会計事務所を辞め、両親の反対を押し切って、以前からのめりこんでいたヴィオラを抱えて札幌にできる交響楽団に加わろうと単身北海道へ。そこで新鋭の指揮者として棒を振っていた男性と恋に落ちて誕生したのがマリ。しかし夫は若くして病死。その後再婚（すぐに離婚）してマリの妹に当たる次女と2人を抱えてシングルマザーとして活動します。演奏会が札幌であ

るばかりでなく、北海道を駆け回り、留守がちながら在宅時は自宅でも楽器を教え、ご近所や所属するカトリック教会の神父様にも協力を仰いでの子育てです。

かなり破天荒な性格でもあるのですが、筆者が母から教えられたこととして、

好きなことに邁進する人が幸せそうだとということ。

人と違っていいということ。国境のない生き方があるということ。

この世界観を母から学び取ったマリです。子どもたちの学校行事にも出席困難な中、「本人の人生は本人に決めさせます」とはつきり言い、マリもしっかりと自分に向き合ってくれている母の姿に、自分の自由奔放なあり方が母から全面的に信頼されている安堵と喜びの証として感じていたと記しています。

自分の人生を他者と比較したり、生き方に対して執拗な理想や思い入れをすることなく、しっかりと見守る姿勢に元氣付けられた本でした。

『言葉はどのようにして人を救うのか——アンネの日記』

植村泰三

この書はNHK教育テレビで放送解説されていた小川洋子氏の講義録を、編集し直して書籍化したものです。小川氏の大ファンである小生ですが、作家であり文学者である小川氏の人間を深く洞察する眼に、また彼女の温かい眼差しに心を打たれます。

周知のようにアンネ・フランクは、ナチスドイツの迫害を逃れるために、心あるオランダ人の屋根裏部屋で潜伏生活を送ります。この間、狭い屋根裏で7人ものユダヤ人が潜伏生活を送るので、ユダヤ人とあらゆる人間の欲や醜い面が出てきてしまいます。それにも拘わらず、彼女は15歳の少女としての曇りの無い目で、温かく人間を観察します。思春期にある少女らしく、「母親への反抗」、「性の芽生えと初恋」、「人を愛することとは何か」など思春期の少女の疑

問と悩みを、率直に描いています。この作品はともすると、ナチスドイツのホロコーストの罪を追求する側面に力点が置かれてしまいがちですが、あくまでも文学作品として高い価値を有しています。彼女と同年齢の若者には是非読んでもらいたいです。

彼女が最も言いたかったことに「私の望みは、死んでからもなお生き続けること！」があります。これこそがこの作品の中心だと僕は考えます。人間はだれでも、いつかは死を迎えます。しかしその魂は生き続け、人々の脳裏に残り、そして来世で再会できるのです。

数年前、この名作が荒らされたことがありました。誰の仕事かは詳細に報道されませんでした。実に恐ろしい犯罪でした。「過去の歴史を知ろうとしない者は、現在及び未来に対しても盲目である」という法諺ほうげんは、我々が心して順守すべき教訓であります。戦争が随所で頻発して、人間の心が荒れています。このような時であるからこそ、15歳で旅立った少女の日記に触れてみることは、我々を凜とした気持ちにしてくれます。

敬愛する三浦綾子

宇田川雅子

今回おすすめた本は以下の通りです。

『愛は忍ぶ 三浦綾子物語 挫折が拓いた人生』（三浦綾子記念文学館監修 日本キリスト教団出版局編）2022年発行。

2022年は三浦綾子生誕100年でした。生きていれば100歳ということですが、実際は1999年に77歳で召されています。

この本は三浦綾子の書籍を引用しながら、そのたぐいまれな人生がダイジェストで書かれています。戦時中、熱心な軍国主義教師だったこと。敗戦を迎え、自分の価値観が完全に覆されたことにより虚無的になり、自殺未遂をするまで追い込まれたこと。その後、結核と脊椎カリエスを発症し、24歳から37歳までの人生の盛りを病床で過ごすことになったこと。虚無

的な生活の中で、幼なじみのクリ

スチャン、前川正と再会し、「も

う何も信じることはできない」と

思いつつも、彼の真摯な生き方に

影響を受け、キリスト者になった

こと。その後、彼と共に人生を歩

むことを切に望むようになったも

の、その2年後に、同様に結核

を患っていた最愛の前川正に先立

たれたこと。そして絶望の中にあ

るときに三浦光世と出会い、3年

後、奇跡的に病が癒され、結婚す

ることになったこと。そしてその

5年後に朝日新聞の1千万円懸賞

小説に応募し、『水点』で見事入

選したこと、などが綴られています。

私は45年ほど前にロンドンに住

んでいた際、『海嶺』の取材のた

めロンドンを訪れた三浦夫妻にお

目にかかりました。その頃から大

ファンで、今も「三浦綾子読書会」

のメンバーです。キリストの愛を

真摯にわかりやすい形で伝える三

浦文学を敬愛しています。読書の

秋、ぜひ一読ください。

神様の恵み

加藤玲奈

私がお勧めしたい本は、ポール・

ギャリコ著『ミセス・ハリス、ニ

ューヨークへ行く』です。この作

品は、元々1970年代に刊行さ

れましたが、最近、改題・文庫化

されました。これを知ったきつ

きは、同シリーズの『ミセス・ハ

リス、パリへ行く』の映画でした。

今と違って、気軽に飛行機で海

外に行ける時代ではないので、イ

ギリスの60歳の家政婦、ミセス・

ハリスが、なぜ、どうやってニュ

ーヨークまで行くのか、題名だけ

でも創造力を掻き立てます。実は

隣の家族の里子が、里親からひど

い目に遭っているのを見て見ぬふ

りは出来ず、一肌ぬぐことになり

ます。ミセス・ハリスは「行動を

開始することにかけて甚だすぐれ

て」おり、ニューヨークへ行くに

ほどの以前からつきあっており、

それを解釈することも、多少経験

を積んでいた」ので、上手くチャ

ンスを掴み、親友の家政婦さんと

隣家の里子を連れてニューヨーク

行きの船に乗り込み、里子の本当

の父親捜しに奮闘するのです。

しかし、思い描いていたように

簡単には父親は見つからず、とう

とう進退きわまり、自分の無力を

感じ希望を失ってしまうのです

が、最後は、想像もしなかった神

様の恵みが待ち受けています。

この本の魅力は、読者もミセス・

ハリスと一緒に冒険するスリルを

味わい、一方で、彼女の誠実な人

柄と楽天的な性格に、楽しく、心

温まる思いもできることです。

私たちが日常で、自分の力では

どうにもならないことに遭遇しま

す。しかし、無力な自分にも神様

が働きかけ、最後には恵みを与え

てくださいます。その恵みは、道

の途上では計り知れませんが、どん

な困難であっても神様が救ってくだ

さることを信じて、そして、ミ

セス・ハリスのようにちよつとし

た行動力も持ち合わせながら生き

ていきたいです。

『哲さんの声が聞こえる』
中村哲医師が見たアフガンの光』

國田あつ子

2019年にアフガニスタンで襲撃されて亡くなった中村哲医師は平和を願い人道支援を続けた人です。

この本は中村医師を「哲さん」と呼び、長く交流のあった歌手の加藤登紀子さんが、彼が亡くなったあと、彼と出会って「心に残ったこと」「哲さんの言葉」を自分の内に留めるだけでなく、どうしても広く伝えたくて、彼の足跡をたどり、残された膨大な記録や著作を読み込み、自身のことと共に著した一冊です。

加藤さんが「哲さん」に初めて会ったのはコンサートの募金を届けたとき。彼の人柄にふれ、それ以来何度も会いました。今年80歳を迎えるという加藤さんは、国内外での音楽活動、国連関係の仕事など、実に精力的に活躍しています。ペンチャール会への募金も続

けています。

この本の第一部は「命をかけたアフガニスタン」。哲さんの言葉をたよりに、その地の歴史、自然、伝統や文化をたどります。第二部は「哲さんへの手紙」。加藤さんの人生の歩みの中で哲さんへの思いを綴っています。第三部は「生きるための10の言葉」。加藤さんが選んだ、未来へ向けて届けたい哲さんの言葉です。

ある年のクリスマス、ようやく繋がった衛星電話で加藤さんが軽い気持ちで「クリスマスおめでとう」と挨拶すると、暫くの沈黙のあとで「お登記さん、ぼくね、クリスマスちゃんなんだよ」と哲さんの一言。というくどりが深く心に残りました。中村哲医師はイスラムに囲まれた地で、たった一人のクリスマスチャンとして使命と信念、愛を持って生き、働かれていたのだと知りました。

『哲さんの声が聞こえる』

中村哲医師が見たアフガンの光』

著者：加藤登紀子

合同出版 2021年発行

ISBN97847726-1465-8

旅と美術館

門田浩一郎

秋と言えば、読書の秋、芸術の秋：ということで、おすすめの本として『フランス人がときめいた日本の美術館』を挙げたいと思います。帯には、「フランス人の美術史家が、10年かけて日本各地を旅し、選りすぐった『本場に訪ねる価値のある』美術館」と書いてあります。古典的な西洋絵画だけでなく、近代美術や日本の浮世絵、彫刻や陶芸・民藝、茶道や服飾など幅広い分野の美術館を取り扱っており、建物やその建築家の説明、日本の美術の解説も学びになります。

この本を知ったきっかけは、同名のテレビ番組でした。椎名桔平さんの落ち着いたナレーションとユーミンの「ベルベット・イースター」のメロディで日本国中の美術館を映像で紹介する番組で、美術館巡りの好きな夫婦で楽しく見ておりました。以前には、旅行や

外出というと名所巡りや食事を楽しみ、土産物を買って帰ることでしたが、今は行ってみたい美術館を訪ねることが旅の軸のひとつとなっっています。

この本に取り上げられている岡山・大原美術館のエル・グレコの『受胎告知』も素晴らしいものでしたし、本で紹介され番組でも取り上げられた美術館に惹かれ、旅の計画を練ることも楽しみです。

美術館にはキリスト教に関する絵画も多いですが、聖書の文字だけでなく画家によって表現された登場人物の感情にも触れ、思いをはせることで、より一層、信仰が深められるようにも思います。

私事ですが、10月に加齢黄斑変性で左目の手術を受けました。目は良い方でしたが、数年前から左目は歪んで見える状態が続き、文字を読むことも難しく、見えることとは当たり前ではなかったと実感しています。また、病気でなくとも、今後、視力は確実に衰えていきます。今、見せていただいていることを主に感謝し、まだ行っていない美術館を巡って心を豊かにできればよいと考えています。

説教

『一体となった賛美』

ホセア書11章1節〜4節

ローマの信徒への手紙15章1節〜6節

岸 俊彦

「私たち強い者は(15・1)とパウロは語ります。食物のタブーに縛られた「弱い者」に対して、キリストの言葉に従って(マルコ7

・19)何でも食べることでできる

パウロは「強い者」です。教会は強い者と弱い者の集まりです。問題はその間に壁があったことです。互いに裁きあったり、侮ったりするならば、主にある兄弟姉妹の交わりではありません。キリストの体である一つの教会とは言えません。

様々な問題を抱え、対立したコリント教会にパウロは書き送りしました。「あなたを優れた者としていいるのは、誰なのですか。あなたを持っているもので、受けなかつたものがあるでしょうか」(1コリント4・7)。パウロの強さは、主が与えてくださったものです。

「私たち強い者は」と語るパウロが元々自覚していたのは弱さです。もろくはかない土の器に過ぎ

ないという自覚です。しかし、土の器に神の力が注がれています(2コリント4・7)。

異邦人の使徒としてパウロが苦しんだのは自らの弱さでした。「肉体の棘」であり「サタンから送られた使い」(2コリント12・7)でした。そのことを対立する相手から攻撃されました。今の時代なら攻撃する側が問題となるどころです。

パウロも対立する者と同じ価値観の持ち主でしたから、「肉体の棘」が取り除かれるようにと必死で祈りました。

「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ」(2コリント12・9)。

パウロの祈りに応えてくださった主の御声によって、その力によって、「キリストの力が私に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇るう」(2コリント

12・9)とパウロは変えられませんでした。主の御声に慰められ、励まされ「私は、弱いときにこそ強い」(12・10)と、パウロは語る事ができました。弱さに働く主の力、弱さに注がれる主の恵みにパウロは目覚めました。

この恵みは、主イエス・キリストご自身の生涯、とりわけ十字架のキリストの恵みです。「キリストもご自身を喜ばせようとはなさいませんでした。『あなた(神)をそしめる者のそしりが、私(キリスト)に降りかかった』と書いてあるとおりです」(15・3、詩69・10)。攻撃する者に反撃することなく、最後までキリストは耐え忍びました。侮辱、困窮、迫害、行き詰まり、弱さの極みで、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになつたのですか」(マルコ15・34)と、天に向かつて絶望の叫びをあげました。「多くの人の罪を担う」苦難の僕である十字架のキリストです(イザヤ53・12)。「キリストは、私たちがまだ弱かった頃、定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました」(ローマ5・6)。「私たち

がまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する愛を示されました」(5・8)。御心に従うことこそ、神が喜んでくださることです。自分の益のためではなく、人の益のために生きるからこそ、私たちの喜びとなります。そのために、どれほどの忍耐を要することでしょう。そして、十字架に磔にされたキリストを見ればわかることです(1コリント1・22〜24)。

パウロはキリストに従います。キリストに倣います。私たちに「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者となりなさい」(1コリント11・1)と語ります。

キリストは裏切った弟子たちのために祈りました。自分を十字架に磔にした者のために祈りました。私たちが共に祈ります。忍耐と慰めの源である神が、私たちを、キリスト・イエスに倣って、同じ思いになるように。心をあわせ、声一つにして、喜び礼拝することから主に仕え、キリストの体である教会を建てるためです。

ルデヤ会講演会報告

2023年度のルデヤ会を引き継いで打ち合わせをした際、可能ならば今年度は講演会を持ちたいとの思いがありました。『このころの友』で紹介された田名夢子さんと「笑恵館」のあり方、女性建築家・デザイナーのチーム WHAIS の KURUP LABO の活動について皆で話を聞き、考えられたら、との希望が出ました。講演会の開催が可能か、講師を依頼できるかと準備を進めました。そうして9月24日に講演会を持つことができました。33名の参加者でした。

講師を引き受けてくださった及川敦子さん、沢田寛子さんは忙しい中、リモートで準備を進めてくださったとのこと。わかりやすく準備された資料をモニターに映して話してくださいました。

「住み開き」とは聞きなれない言葉ですが、周りを囲って安全を確保するのではなく、垣根、住まいをオープンにして風通し良く、普段から近隣の人たちとの繋がりをもちつつ暮らす。今までの暮らしを保ちながら、あるいは新

しい形で、それぞれのやり方でも例を挙げて話していただきました。

きっかけになった「笑恵館」は、田名さんの「めったに会わない身内よりも気心の知れた近所の他人とお付き合いしながら住み慣れたまちで人生を全うしたい」との思いから、居住スペースをまとめて、空いたスペースを様々な集会ができる場所になっています。小さな子どもと一緒に集まれる場、趣味の集まり、聖書の話を聞く、など。アパートもあつて住人には月に1度食事を共にする義務！がある。食事を始めてからは住人同士のトラブルがなくなつたとのこと。

年をとつてからの暮らし方は、健康状態、家族、実家のこと、それぞれ事情があつて、簡単には決められない、進まないことですが、思い切つた形、発想の転換を教えられました。何かあれば相談できる窓口も得ることができました。

田名さんの思いに、「それは教会にあるじゃないかと思つた、この活動を知つてもらうことができて嬉しい」との及川さんの言葉がとても印象に残りました。

(照内真知子)

長老のファイル

早いものでもう11月です。教会行事も、召天者記念礼拝、幼児祝福式と続いたら、クリスマスはすぐそこです。そうになると、年が明けて年度末もすぐに感じられ、少々焦りを覚えるものです。コロナ禍と高齢化による礼拝出席者の減少、教会財政の落ち込み、牧師交代を含む教会の将来構想などの課題は、今年度下期も引き続き長老会で検討してまいります。

さて、長らく新型コロナ対応として続いた礼拝堂の座席の間引きも解消し、召天者記念礼拝とクリスマス礼拝は午前・午後に振り分けることなく、通常通り午前みの開催に戻ります。マスクの着用や教会内での飲食を伴う集会の自粛はもうしばらく継続しますが、これらの解消もすぐそこに近づいていることは嬉しいことです。できることなら、岸牧師のラストイヤーとなる来年度は、コロナ禍前の教会の姿に近づいた状態で迎えられるばと祈ります。

また、その岸牧師の後任として、

2025年度より牧会を担う主任担任教師の招聘を進めておりましたが、今般お引き受けくださる先生が与えられました。詳細は10月の長老会報告の通りですが、今後必要な手続きを踏み、臨時教会総会で承認されれば、正式決定となります。主が私たちの願いを聞き入れてくださるうとしていることは、誠にありがたいことです。ただし、内諾いただいた先生が現在牧会されている教会でも、辞任や後任牧師の招聘などの手続きが生じます。そのことを心に留め、祈りに寛えたいと思います。

気は早いですが、来年度は新体制に円滑に移行するための準備のときでもあります。古くならつた牧師館の改築、教会の規則集や教会事務の整理、後任牧師への引継ぎなどを進める必要があります。何しろ、担任教師の任期が重ならぬい形での牧師交代は、当教会では初めてのことであります。教職・長老会を中心に、教会員皆で祈りつつ準備にあたりましょう。そして諸事万端を整え、安心して感謝を込めて、岸牧師・恭子夫人を送り出せばと思ひます。

(原 良介)

牧師の書齋から

礼拝中に50才くらいの男性が訪ねてきたそうです。以前、教会学校に出席していたとのことでした。近くに来たので懐かしくなりました。寄ってみたこのことです。

「A先生はお元気でしょうか」。「学校に勤めています」。

A先生から電話がありました。学園祭に、その頃の写真と彼宛の手紙を持って訪ねてくれたそうです。「彼のことは覚えていなかった

たのですが嬉しいことでした。ありがとうございました。」

同じ頃電話がありました。

「B先生はお元気でしょうか。30年ほど前、教会学校でお世話になりました」。

「ホームで生活しています」。

「そんなお年でしたのでしょうか。とてもお若かったと思っていました。教会宛に手紙を送ってもよいでしょうか」。

手紙はまだ届いていません。B先生はよく子どもたちのことを気にかけていました。我が家の中年

となった息子たちのことも、時折尋ねてくださいました。

子どもたちが教会学校から教会へと連なり、受洗して教会員となり、共に教会生活をするのを心から願っています。しかし、なかなかこの願いはかなえられません。だからといって御心になかった願い(1ヨハネ5・14)ではないのか、と疑ったことはありません。

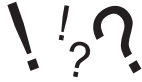
かつて出席していた教会学校のことを、とりわけ先生のことを懐かしく思い出すのはどういう時なのでしょう。先生の声を聞いた

い、会いたいとわざわざ連絡してくるのはどうしてでしょう。

かつて地下の部屋が一杯になるほど大勢の子どもたちが教会学校に出席していました。それから30年、40年経って、連絡してくれたのはたった2人です。でも、とても励まされる出来事でした。

子どもたちの名前を覚えているわけではありません。しかし、主は覚えていくくださるでしょう。大人となった子どもたち、大人となる子どもたちのために主の祝福を祈り続けたいと思います。(岸)

個人消息



掲示板



- 合同礼拝 11月12日(日) 午前10:15
説教「良いところを見てまねくイエスさま」
ヨハネ1・45-49 中村謙一教師
幼児祝福式(礼拝後)
- 創立86周年記念礼拝
11月19日(日) 午前10:15
説教 岸 俊彦牧師
- アドベント 12月3日(日) 午前10:15
- クリスマス礼拝 12月24日(日) 午前10:15
- イブ礼拝 12月24日(日) 午後5:00

編集後記



▽お勤めの本は逢坂冬馬の『同志少女よ、敵を撃て』。独ソ戦で狙撃兵となった少女のシビアだけれど胸が熱くなる物語です。(酒井)

「栄 光」2023年11月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp